

MEGA 第 1 部門第 5 巻付録『ドイツ・イデオロギー』CD-ROM 版の編集

平子友長（一橋大学）

1. MEGA 第 1 部門第 5 巻付録として『ドイツ・イデオロギー』第 1 章が編集され、その編集が日本人研究者に委任されるに至った経過

2006 年 11 月ベルリン・ブランデンブルク科学アカデミー（以下 BBAW と略記）で開催された「新 MEGA 編集に関する独日専門家会議」において、『ドイツ・イデオロギー』を収録する MEGA 第 1 部門第 5 巻（以下 I-5 と略記）に CD-ROM を付録 Beilage として付加すること、およびその編集を日本人研究者¹の手に委ねることが同意された²。続いて 2007 年 1 月 26 日に開催された国際マルクス・エンゲルス財団（以下 IMES と略記）の理事会で、この合意が正式に承認された。最初に、このような決定に至った経緯について説明したい。

1975 年から刊行が開始されたいわゆる新 MEGA（4 部門構成、全 114 巻、既刊 52 巻）の各巻は、通例、テキストとアパレート（学術付属資料）の二巻から構成されている。アパレートには、異文、訂正、注解、索引（人名・事項・文献）、テキストの成立と来歴等が収録されている。新 MEGA の研究的価値は、主として、アパレートが提供する書誌学的情報にかかっている。

新 MEGA 刊行開始から 40 年以上が経過した。『資本論』とその準備諸草稿を収録する第 2 部門（全 23 巻、既刊 20 巻）は、あと II-4-3, II-11, II-13 の 3 巻を残すのみであり、2008 年までに完結する見通しができているが、他の 3 部門は大半が未刊の状態である。IMES の財政的支援による新 MEGA 刊行も 2015 年をもって終了することが決定されており、それまでに刊行されない諸著作は、何らかの代替的財政的支援が講じられなければ、永遠に公刊される機会を失うことになる。

マルクス、エンゲルスの最重要著作の一つであり、第 1 部門の主要巻の一つをなすものでありながら、現時点でも刊行されていない巻が、『ドイツ・イデオロギー』を収録する I-5 巻であった。

その最大の理由は、『ドイツ・イデオロギー』第 1 章「フォイエエルバッハ」のオリジナル草稿を編集することの特別の難しさであった。

第 1 章の草稿は、マルクス、エンゲルスの共同執筆、共同改稿の生々しい痕跡を示している。普通の著作や草稿の場合には、最終稿だけが重視される。しかし『ドイツ・イデオロギー』は、草稿の成立過程それ自身がマルクス、エンゲルスによる唯物論的歴史観の成

¹ I-5 の日本人編集委員は、渋谷正（編集責任者）、窪俊一（電子情報化統括責任者）、大村泉（コーディネーター）、小林一穂、渡辺憲正、佐山圭二、平子友長である。その後、中国から韓立新が新たに参加することが承認される。

² 合意事項については、大村・渋谷・平子（2007a）を参照。

立を記録するドキュメントであると同時に、この歴史観の成立にあたってマルクス、エンゲルスがそれぞれいかなる役割を果たしたのかという論点（いわゆる「持分問題」）を解明するための最重要テキストである。従って『ドイツ・イデオロギー』の編集にあたっては、最終テキストに至るマルクス、エンゲルスのテキスト推敲過程のすべてを克明に記録する必要がある。

これまで第 1 章「フォイエエルバッハ」の原文テキストの編集としては、リャザーノフ版（1926）、アドラツキー版（1932）、ヴェルケ版（1969）、新メガ試行版（以下、試行版と略記）（1972）、廣松渉版（1974）、2003 年年報版（以下、年報版と略記）（2004）の 6 つの版が刊行されているが、いずれの版も大きな問題を抱えている。以上の版本のなかで最も精度の高い編集を行ったのは、試行版であった。試行版が採用した改稿過程の平行表記法 *Zeilenparallelisierung* は、オリジナル草稿の複雑な改稿過程を時系列的に表記する画期的な表記法であったが、草稿の改稿過程を具体的かつ可視的に表象しにくいという弱点を抱えている。またこの表記法はドイツ語の構文構造に著しく依存した表記法であるため、そのままの形ではドイツ語以外の言語に翻訳することが不可能であるという問題点もあった。

改稿過程をテキスト本文中に組み込み、かつ試行版になお含まれていた遺漏を補い、現在までのところ最も精度の高い編集を行ったのは渋谷版（1998）であるが、これはドイツ語テキストを装備しない日本語のみによる刊本であり、日本語を理解することのできる読者に対してしか通用しないという点で、重大な制約があった。

年報版は、基本的には、試行版に依拠している。年報版は、試行版に存在していた遺漏を収録するなど少なからぬ改善が施されている点で、現存するドイツ語テキストの中で最も信頼できる刊本である。しかし、年報版にもなお克服すべき問題点が含まれている。これについては、後述する。

『ドイツ・イデオロギー』の編集を著しく困難にさせたもう一つの問題は、第 1 章「フォイエエルバッハ」草稿の配列問題である。第 1 章の草稿は、以下の典拠文献群から成り立っている。

- ①「序文 *Vorrede*」と題され、ボーゲン番号もページ番号も記されていない便箋一枚。
- ②ボーゲン番号もページ番号も記されていない紙二枚
- ③1962 年バーネによって初めて公表された紙一枚。マルクスによって表に 1 ページ、裏に 2 ページと記されている。
- ④エンゲルスまたはベルンシュタインの筆跡によってボーゲン番号 1 から 11 まで記された紙十一枚。第 6 ボーゲンから第 11 ボーゲンまでは、マルクスによって 8 から 29 までページ番号が記されている。
- ⑤エンゲルスが 20,21 とボーゲン番号を記した紙二枚。これは、当初、「聖マックス」章「ヒエラルヒー」の一部として書かれたが、後に第 1 章「フォイエエルバッハ」に組み込まれるにあたりマルクスによって 30 から 35 までのページ番号が記されているグループである。

⑥エンゲルスによって 84 から 92 までボーゲン番号が付けられている紙九枚。これは、当初、「聖マックス」章「市民社会としての社会」の一部として書かれたが、後に第 1 章「フオイエルバッハ」に組み込まれるにあたりマルクスによって 40 から 72 までのページ番号が記されているグループである。

『ドイツ・イデオロギー』の編集は、上記のような六つのグループからなる草稿群をどのような基準と根拠に従って配列するのかという問題を解決しなければならない。特に①から④は、異なる時期に書かれた第 1 章の冒頭部分の複数の清書稿と見なされ、これらをどのように配列するのかという問題は、第 1 章「フオイエルバッハ」の構想が『ドイツ・イデオロギー』執筆の最終段階にいたって浮上してきたという事情とそれに由来する『ドイツ・イデオロギー』全体の成立過程の解釈問題とも密接にからんでおり、単なる技術的問題として処理することのできない問題であった。

試行版の編集を担当したのはタウベルト Inge Taubert であったが、1990 年 IMES 設立以降、I-5 の編集は、タウベルト、グランジョン Jacques Granjonc、ハンス・ペルガー Hans Pelger の三人に委ねられ、トリーアのフリードリヒ・エーベルト財団附属カール・マルクス・ハウスを作業拠点にして編集に当たることになった。しかしグランジョンの急逝 (2000 年)、ペルガーの引退 (2003 年)、フリードリヒ・エーベルト財団の IMES からの撤退 (2003 年) 等の事情により、トリーアでの編集作業に終止符が打たれ、第 1 章「フオイエルバッハ」のみが Marx/Engels Jahrbuch 2003 において公表された。その後 IMES は、編集をフープマン Gerald Hubmann (編集責任者)、シュパール Richard Sperl、ヴェックヴェルト Christine Weckwerth、パーゲル Ulrich Pagel の手に委ね、2010 年までに I-5 巻を公刊するよう委任した (2004 年)。

フープマンらが採用した編集方針の基本は、『ドイツ・イデオロギー』は、もはや、編集者たちによって構成され完結させられるような作品と見なされてはならず、…編集の課題は (もはや) 著者たちによって刊行されなかった作品の再構成にあるのではない (フープマン他、2007, p.12) という点にあった。

『ドイツ・イデオロギー』を、関連するテーマに従って編集しようとするれば、草稿の内容の解釈に深く立ち入らざるを得ず、恣意的解釈に基づく恣意的な構成の危険が増大する。

しかし、恣意的解釈を避けるために、典拠文書をその成立時期に従って配列する編年的方法を採用すれば、以下の諸問題に直面する。

(1) 正確な成立時期を確定できないテキストが少なからず存在する。

(2) 「序文」(①) または書き出しの清書稿であることが明白である文書(②③と④の冒頭)が、テキスト本文よりも後に置かれてしまう。

(3) 「バウアー」章 (⑤)、「シュティルナー」章 (⑥) をばらばらに分割せざるを得ない。

従って、『ドイツ・イデオロギー』の構成は、内容的編成と編年的編成の二つの方法を組み合わせて行う他ない。しかしこの組み合わせ方法をめぐって、研究者の見解は様々に分かれた。

「数十年にわたる議論が示しているように、ここでは完全な意見の一致が達成されることはそもそも不可能である、と言わざるをえない。…われわれは、テキスト構成の根拠を明らかにするが、しかしそうした構成が唯一可能な構成だという要求をもはやもたない。」(フープマン他、2007, p.13)

以上が、フープマンら新編集グループの下した結論であった。

以上指摘した『ドイツ・イデオロギー』編集上の諸問題は、実は、書籍形態での編集・出版という情報伝達素材の制約に由来する面が大きかった。書誌的情報を電子情報の形態で提示することができれば、上記の問題を基本的に解決することができる。

まずテキストの配列問題に関して言えば、フープマンらは I-5 テキスト巻で示す配列が「唯一可能な構成だという要求をもはやもたない」という立場を採るが、それでも紙媒体で刊行する場合には、複数の妥当な選択肢のうちから唯一の配列を選択せざるを得ない。ところが、CD-ROM 形式で編集する場合には、配列を一つに限定する必要はない。従来の研究史の中で提示された有力な配列案をファイルとして組み込んでおけば、利用者の需要に合わせて、クリックすることで任意の配列方式を呼び出すことができる。さらに利用者は、自分の解釈に適合した配列を自由に編集することも可能となる。

オリジナルの再現に電子情報技術がいかなる可能性を切りひらくかは、節を改めて述べたい。

2. MEGA 第1部門第5巻付録『ドイツ・イデオロギー』CD-ROM 版の編集の紹介

以下に、MEGA 第1部門第5巻付録『ドイツ・イデオロギー』CD-ROM 版の実際の編集方法を具体的に紹介したい。CD-ROM 版に収録される情報は、第1章「フォイエルバッハ」草稿に関わる以下の諸情報である。

- (1)草稿の各頁のオリジナル画像
- (2)即時異文を含む第一異文
- (3)即時異文を取り除いた第一異文
- (4)マルクス、エンゲルスの改稿過程の再現
- (5)すべての改稿を伴った最終文 *Endfassung* の表示
- (6)最終文だけの表示

(1)『ドイツ・イデオロギー』第1章「フォイエルバッハ」は、紙数にして26ボーゲン、98ページ（白紙や全文抹消されたページを含む）の草稿から成り立っている。

CD-ROM 版は、まずオリジナル草稿すべてのデジタル画像を各ページごとに収録する。デジタル画像の利点は、特に判読の困難な箇所など必要に応じて自由に縮小拡大することができることであり、多様な検索が可能になることである。

(2)次に、草稿の各ページについて、即時異文を含めて最初の文章を表示する。その際、解説文の改行はオリジナル草稿のそれと等しくさせる。このことによって読者は、解説文を参照しながらオリジナル草稿を読むことができる。

即時異文で抹消された箇所は、『2003 年報』のアパレートに記載されているものは黄色で、未記載のものは黄緑色で表示した。また抹消後挿入された箇所は、水色で表示した。

エンゲルスによる訂正は文字を囲む四角い色で、マルクスによる訂正は文字自体を変色させることによって表示した。(4)以下の表示の仕方も同様である。

(3)次に、前項の第一異文から即時異文を取り除いた文章を表示する。これが、マルクス、エンゲルスの最初の完成文（第一異文）である。草稿の改定は、厳密には、ここから始まる。

(4)次に、それ以降のマルクス、エンゲルスによる改稿過程を、各ページに即して、改稿の各段階ごとに、以下のような色分けによって表示する。

削除された箇所について、『2003 年報』のアパレートに記載されているものは赤色で、未記載のものは桃色で表示する。また抹消後、新たに挿入された箇所は、緑色で示した。

第一異文がそのまま最終文となる場合、(4)は存在しない。第一異文がその後複数回改稿される場合には、(4)は複数段階に分けられる。(4)の段階構成は、オリジナル草稿の各ページごとに異なる。

(5)次に、(2)と(4)におけるすべての削除、挿入を表示した画面を表示する。通時的に行われた改稿過程がすべて共時的に表示される。これが、すべての改稿を伴った最終文 *Endfassung* であり、オリジナル草稿の状態を最も忠実に再現する画面となる。

(6)最後に、(5)で表示された文章から削除、変更された箇所をすべて取り除くと、最終文が現れる。これが、『ドイツ・イデオロギー』の最終的なテキストとなる。これは、I-5 のテキストと同一の文章であるが、行編成がオリジナル草稿に従っている点が、メガ本体のテキストと異なる点である。

以上が CD-ROM 版の編集方法についての一般的説明である。

次に、これを適用した編集の実例を紹介してみたい。以下に紹介するものは、オリジナルで 20 ページと表示されている草稿である（『2003 年報』 23-24 ページ）。

(1) オリジナル草稿の画像

Die Deutsche Ideologie Das Original S.20 Jahrbuch 03 S.23-24

(ここにオリジナル草稿の画像を挿入する)

(2) エンゲルスによる即時異文を含む第一異文

Deutsche Ideologie Das Original S.20

Jahrbuch 03 S.23-24

Die erste Fassung mit Sofortvarianten von Engels

使用記号・色一覧

★即時異文

○ sofortige Variante (Abbrechung)

○ sofortige Variante (Abbrechung) (*fehlt in MEJ 2003*)

↓

○ Geänderte Stelle (von ○ in ○)

★削除

○ Tilgung

○ Tilgung (*fehlt in MEJ 2003*)

↓

○ Geänderte Stelle (von ○ in ○)

★追加・挿入

○ Ergänzung

○ Ergänzung (*fehlt in MEJ 2003*)

★欠落テキスト部分

○ keine entsprechende Entzifferung in *MEJ 2003* od. Fraglich

★不明箇所

○

★中断された語句の推定に基づく補足

[] : 例 hinterl[assenen], Ame[rika]

[20] Die Geschichte ist nichts als dieAufeinan- 9.

derfolge der einzelnen Generationen,
die von denen Jede³ dasie ihr von allen
vorhergegangenen hinterla[ssenen] übermachten
Kapitalien, Materiale, Produktions-
kräfte exploitirt, daher also einerseits
unter ganz veränderten Umständen die
und alte überkommene Tätigkeit
fortsetzt & andererseits mit einer ganz
veränderten Tätigkeit die alten
Umstände modifizirt, was sich nun
spekulativ so verdrehen läßt, daß
die spätere Geschichte zum Zweck der
früheren gemacht wird, z. B. daß
Ame[rika] der Entdeckung Amerikas der Zweck
zum Grunde lag, der französischen
Revolution zum Durchbruch zu ver-
helfen, wodurch dann die Geschichte
ihre Zw[ecke] aparten Zwecke erhält &
eine „Person neben anderen
Personen“ (als da sind „Selbstbe-
wußtsein, Kritik, Einziger“) wird,
während das, was man mit den Worten
Nat[ur] „Bestimmung“, „Zweck“, „Keim“, „Idee“ der
früheren Geschichte bezeichnet, weiter
nichts ist als eine Abstraktion aus von
der späteren Geschichte, aus von dem Resul-
tat & Produkt dessen, worin man eben
diese Geheimnisse sucht. aktiven
Einfluß, den die frühere Geschichte auf
die spätere ausübt. – Je weiter
sich im Laufe dieser Entwicklung nun
die einzelnen Kreise die aufeinan-
der einwirken, ausdehnen, je weni[ger]
mehr die Ab[geschlossenheit] ursprüngliche Abgeschlossen-

³ 『2003 年年報』 アパレート (S.229) では、 Jede <das ihr von allen vorhergegangenen hinterla>/と記載されている。この記載方法の問題点については、本文で述べる。

heit der einzelnen Nationalitäten durch die ausgebildete Ver[häitnisse⁴ od. kehrsform⁵] Produktionsweise, Verkehrsform & massenhafte Theilung der Arbeit aufgehoben vernichtet wird, desto mehr wird die Geschichte zur Weltgeschichte, sodaß z. B. wenn in England eine Maschine erfunden wird, die in Indien & China zahllose Arbeiter außer Brot setzt & die ganze Existenzform dieser Reiche umwälzt, diese Erfindung zu einem weltgeschichtlichen Faktum wird; oder daß der Zucker & Kaffee ihre weltgeschichtliche Bedeutung im neunzehnten Jahrhundert dadurch bewiesen, daß der durch das napoleonische Continentalsystem her[vorgebrachte] notwendig gem[achte] erzeugte Mangel an diesen Produkten die Deutschen/ /21/ gegen Napole[on] zum Aufstande zum Aufstande⁶ gegen Napoleon brachte & so die reale Basis der glorreichen Befreiungskriege wurde.

(3)即時異文を取り除いた第一異文

Die Deutsche Ideologie Das Original S.20 Jahrbuch 03 S.23-24

⁴ アドラツキー版による推測。

⁵ 試行版による推測。

⁶ zum Aufstande は、一度抹消されたが、後に復活記号を付して復活された。年報版アパ
ラート (S.230) では、この箇所の表記は、Deutschen || 21 | <gegen Napole[on]>/ <zum
Aufstande>/となっている。このあとテキストは zum Aufstande gegen Napoleon brachte
と続く。ここでは、gegen Napoleon は一度抹消された後、再度書き直されているのに、zum
Aufstand は、上記のように、復活記号によって復活させられている。新 MEGA が採用し
ている論証的表記法では、こうした変更の実現方法に関わる相違はすべて無視される。

Die erste Fassung ohne Sofortvarianten von Engels

[20] Die Geschichte ist nichts als die Aufeinanderfolge der einzelnen Generationen, von denen Jede die ihr von allen vorhergegangenen übermachten Kapitalien, Materiale, Produktionskräfte exploitirt, daher also einerseits unter ganz veränderten Umständen die überkommene Thätigkeit fortsetzt & andererseits mit einer ganz veränderten Thätigkeit die alten Umstände modifizirt, was sich nun spekulativ so verdrehen läßt, daß die spätere Geschichte zum Zweck der früheren gemacht wird, z. B. daß der Entdeckung Amerikas der Zweck zum Grunde lag, der französischen Revolution zum Durchbruch zu verhelfen, wodurch dann die Geschichte ihre aparten Zwecke erhält & eine „Person neben anderen Personen“ (als da sind „Selbstbewußtsein, Kritik, Einziger“) wird, während das, was man mit den Worten „Bestimmung“, „Zweck“, „Keim“, „Idee“ der früheren Geschichte bezeichnet, weiter nichts ist als eine Abstraktion von der späteren Geschichte, von dem eben aktiven Einfluß, den die frühere Geschichte auf die spätere ausübt. – Je weiter sich im Laufe dieser Entwicklung nun die einzelnen Kreise die aufeinander einwirken, ausdehnen, je mehr die ursprüngliche Abgeschlossen-

heit der einzelnen Nationalitäten
durch die ausgebildeterere Produk-
tionsweise, Verkehrsform & massen-
hafte Theilung der Arbeit
vernichtet wird, desto mehr wird
die Geschichte zur Weltgeschichte, sodaß
z. B. wenn in England eine Maschine
erfunden wird, die in Indien &
China zahllose Arbeiter außer Brot
setzt & die ganze Existenzform dieser
Reiche umwälzt, diese Erfindung
zu einem weltgeschichtlichen Fak-
tum wird; oder daß der Zucker
& Kaffee ihre weltgeschichtliche Bedeu-
tung im neunzehnten Jahrhundert
dadurch bewiesen, daß der durch
das napoleonische Continentalsystem
erzeugte Mangel
an diesen Produkten die Deutschen/
/21/ zum Aufstande gegen
Napoleon brachte & so die reale
Basis der glorreichen Befreiungs-
kriege wurde.

(4)エンゲルスによる訂正を含む第二異文

**Die Deutsche Ideologie Das Original S.20
Jahrbuch 03 S.23-24
Die zweite Fassung mit Korrekturen von Engels**

[20] Die Geschichte ist nichts als dieAufeinan- 9.
derfolge der einzelnen Generationen,
von denen Jede die ihr von allen
vorhergegangenen übermachten
Kapitalien, Materiale, Materiale, Kapitalien, Produktions-

kräfte exploitirt, daher also einerseits unter ganz veränderten Umständen die überkommene Thätigkeit fortsetzt & andererseits mit einer ganz veränderten Thätigkeit die alten Umstände modifizirt, was sich nun spekulativ so verdrehen läßt, daß die spätere Geschichte zum Zweck der früheren gemacht wird, z. B. daß der Entdeckung Amerikas der Zweck zum Grunde **gelegt wird**⁷, der französischen Revolution zum Durchbruch zu verhelfen, wodurch dann die Geschichte ihre aparten Zwecke erhält & eine „Person neben anderen Personen“ (als da sind „Selbstbewußtsein, Kritik, Einziger **&c**“⁸ wird, während das, was man mit den Worten „Bestimmung“, „Zweck“, „Keim“, „Idee“ der früheren Geschichte bezeichnet, weiter nichts **ist**⁹ als eine Abstraktion von der späteren Geschichte **ist, e[ine] Abstr[aktion]** von dem eben aktiven Einfluß, den die frühere Geschichte auf die spätere ausübt. – Je weiter sich im Laufe dieser Entwicklung nun die einzelnen Kreise die aufeinander einwirken, ausdehnen, je mehr die ursprüngliche Abgeschlossenheit der einzelnen Nationalitäten durch die ausgebildete Produk-

⁷ 『2003年草稿』(S.229)では、zum Grunde lag> zu Grunde gelegt wird と記載されている。

⁸ オリジナル草稿には、閉じの括弧が欠けている。

⁹ ist, e[ine] Abstr[aktion]を挿入したのは、最初の ist は不要になり、抹消されるべきであったが、オリジナルでは抹消されずに残されている。

tionsweise, Verkehrsform¹⁰ & massen-¹¹
hafte¹² dadurch naturwüchsig¹² hervorgebrachte Teilung der Arbeit zwischen
verschied[nen] Nationen

vernichtet wird, desto mehr wird
die Geschichte zur Weltgeschichte, sodaß
z. B. wenn in England eine Maschine
erfunden wird, die in Indien &
China zahllose Arbeiter außer Brot
setzt & die ganze Existenzform dieser
Reiche umwälzt, diese Erfindung
zu einem weltgeschichtlichen Fak-
tum wird; oder daß der Zucker
& Kaffee ihre weltgeschichtliche Bedeu-
tung im neunzehnten Jahrhundert
dadurch bewiesen, daß der durch
das napoleonische Continentalsystem
erzeugte Mangel
an diesen Produkten die Deutschen/
/21/ zum Aufstande gegen
Napoleon brachte & so die reale
Basis der glorreichen Befreiungs-
kriege von 1813 wurde.

(5)すべての改稿を伴った最終文 Endfassung の表示

Die Deutsche Ideologie Das Original S.20

Jahrbuch 03 S.23-24

Die Endfassung mit allen Korrekturen von Engels & Marx

¹⁰ 『2003 年年報』(S.230) では、Verkehrsform>Verkehr と記載されている。

¹¹ エンゲルスは、massenhafte 全体を抹消するつもりであったが、実際に抹消されているのは hafte だけであった。

¹² オリジナルでは、まず dadurch hervorgebrachte と挿入されたのちに、あとから更に naturwüchsig が挿入されている。

|20| Die Geschichte ist nichts als die Aufeinanderfolge der einzelnen Generationen, die von denen Jede dasie ihr von allen vorhergegangenen hinterla[ssenen] übermachten Kapitalien, Materiale, Materiale, Kapitalien, Produktionskräfte exploitirt, daher also einerseits unter ganz veränderten Umständen die und alte überkommene Thätigkeit fortsetzt & andererseits mit einer ganz veränderten Thätigkeit die alten Umstände modifizirt, was sich nun spekulativ so verdrehen läßt, daß die spätere Geschichte zum Zweck der früheren gemacht wird, z. B. daß Ame[rika] der Entdeckung Amerikas der Zweck zum Grunde gelaegt wird, der französischen Revolution zum Durchbruch zu verhelfen, wodurch dann die Geschichte ihre Zw[ecke] aparten Zwecke erhält & eine „Person neben anderen Personen“ (als da sind „Selbstbewußtsein, Kritik, Einziger &c) wird, während das, was man mit den Worten Na[tur] „Bestimmung“, „Zweck“, „Keim“, „Idee“ der früheren Geschichte bezeichnet, weiter nichts ist als eine Abstraktion aus von der späteren Geschichte, ist, e[ine] Abstr[aktion] aus von dem Resul- tat & Produkt dessen, worin man eben diese Geheimnisse sucht. aktiven Einfluß, den die frühere Geschichte auf die spätere ausübt. – Je weiter sich im Laufe dieser Entwicklung nun die einzelnen Kreise die aufeinander-

¹³ 数字の色による表記は、マルクスによってページ番号が 9 から 20 に書き直されたことを示す。本来は、このマルクスによる変更を (4-2) として独立の改稿段階として示すべきであるが、煩瑣になるので省略した。

der einwirken, ausdehnen, je weni[ger]
mehr die Ab[geschlossenheit] ursprüngliche Abgeschlossen-
heit der einzelnen Nationalitäten
durch die ausgebildeteren Ver[hältnisse od. Kehrsform] Produk-
tionsweise, Verkehrsform & massen-
hafte dadurch naturwüchsig hervorgebrachte Theilung der Arbeit zwischen
verschied[nen] Nationen aufgehoben
vernichtet wird, desto mehr wird
die Geschichte zur Weltgeschichte, sodaß
z. B. wenn in England eine Maschine
erfunden wird, die in Indien &
China zahllose Arbeiter außer Brot
setzt & die ganze Existenzform dieser
Reiche umwälzt, diese Erfindung
zu einem weltgeschichtlichen Fak-
tum wird; oder daß der Zucker
& Kaffee ihre weltgeschichtliche Bedeu-
tung im neunzehnten Jahrhundert
dadurch bewiesen, daß der durch
das napoleonische Continentalsystem
her[vorgebrachte] notwendig gem[achte] erzeugte Mangel
an diesen Produkten die Deutschen/
/21/ gegen Napole[on] zum Aufstande zum Aufstande gegen
Napoleon brachte & so die reale
Basis der glorreichen Befreiungs-
kriege von 1813 wurde.

(6) 最終文だけの表示

Die Deutsche Ideologie Das Original S.20

Jahrbuch 03 S.23-24

Die Endfassung ohne Korrekturen

[20] Die Geschichte ist nichts als dieAufeinan- 20)
derfolge der einzelnen Generationen,

von denen Jede die ihr von allen
vorhergegangenen übermachten
Materiale, Kapitalien, Produktions-
kräfte exploitirt, daher also einerseits
unter ganz veränderten Umständen die
überkommene Thätigkeit
fortsetzt & andererseits mit einer ganz
veränderten Thätigkeit die alten
Umstände modifizirt, was sich nun
spekulativ so verdrehen läßt, daß
die spätere Geschichte zum Zweck der
früheren gemacht wird, z. B. daß
der Entdeckung Amerikas der Zweck
zu Grunde gelegt wird, der französischen
Revolution zum Durchbruch zu ver-
helfen, wodurch dann die Geschichte
ihre aparten Zwecke erhält &
eine „Person neben anderen
Personen“ (als da sind „Selbstbe-
wußtsein, Kritik, Einziger &c) wird,
während das, was man mit den Worten
„Bestimmung“, „Zweck“, „Keim“, „Idee“ der
früheren Geschichte bezeichnet, weiter
nichts ist als eine Abstraktion von
der späteren Geschichte ist, e[ine] Abstr[aktion] von dem
eben
aktiven
Einfluß, den die frühere Geschichte auf
die spätere ausübt. – Je weiter
sich im Laufe dieser Entwicklung nun
die einzelnen Kreise die aufeinan-
der einwirken, ausdehnen, je
mehr die ursprüngliche Abgeschlossen-
heit der einzelnen Nationalitäten
durch die ausgebildeteren Produk-
tionsweise, Verkehr &

dadurch naturwüchsig hervorgebrachte Theilung der Arbeit zwischen verschied[nen]
Nationen
vernichtet wird, desto mehr wird
die Geschichte zur Weltgeschichte, sodaß
z. B. wenn in England eine Maschine
erfunden wird, die in Indien &
China zahllose Arbeiter außer Brot
setzt & die ganze Existenzform dieser
Reiche umwälzt, diese Erfindung
zu einem weltgeschichtlichen Fak-
tum wird; oder daß der Zucker
& Kaffee ihre weltgeschichtliche Bedeu-
tung im neunzehnten Jahrhundert
dadurch bewiesen, daß der durch
das napoleonische Continentalsystem
erzeugte Mangel
an diesen Produkten die Deutschen/
/21/ zum Aufstande gegen
Napoleon brachte & so die reale
Basis der glorreichen Befreiungs-
kriege von 1813 wurde.

3. 年報版の編集の問題点

オリジナル草稿 20 ページの解読結果は、年報版にもなお検討すべきいくつかの問題点が存在することを示している。

(A) 脱漏

年報版の各ページに、オリジナルに存在しながら、テキストにもアパレートにも記載されていない脱漏が少なからず存在する。

(2)において黄緑色で囲った箇所 (die, und, Na, Ab) は、アパレートにおいて<die>/, <und>/, <Na>/, <Ab>/と記載されるべき所であるが、そのような記載は存在しない。

(B) 論証的表記法 *diskursive Verzeichnung*

以下に指摘する問題点は、新 MEGA が異文表記において記述的表記法 *deskriptive Verzeichnung* ではなく、論証的表記法 *diskursive Verzeichnung* を採用していることに由来す

る。

記述的表記法は、オリジナルの姿をできるかぎり忠実に記述的に再現する表記法である。これに対して、論証的表記法とは、オリジナルのテキスト的価値を持つ情報だけを記載し、その情報の実現形態は記載しない表記法である。I-5 巻の編集委員の一人であるシュパールは、次のように述べている。

「新 MEGA における異文表記は、テキスト変更の意味的・言語的内容と位置価値の再現を目指している。したがって、テキストにおいて何が変更されたのかという点に、向けられている。また、これと並んで、テキストを修正するために、どんな処理（削除、補足、書き換え）がなされたのかについての情報提供も目的としている。だが、テキスト変更の仕方や場所（行の上か下か、左あるいは右の欄外か……等々）についての報告は断念している。……編者の課題は、テキストの展開を確定するために、まさに手稿の持つ偶然性を捨象する点に存する。」（シュパール、2007, p.25 傍点はシュパール）

例えば、**der Mensch** が **die Menschen** に変更された場合、記述的表記法は、この変更の事実だけでなく、この変更がなされた形態をも記述する。例えば、**der** が **die** に変更される際に、**der** 全体が抹消された後 **die** が挿入されたのか、それとも **er** が **ie** と書き直されるだけで **d** は不変更のままであるのか、などの情報を記述する。また **Mensch** が **Menschen** に変更される際の変更の仕方（**Mensch** の語尾に **en** が書き加えられただけなのか、それとも **Mensch** が一旦抹消された上で **Menschen** と書き加えられたのか）も記述する。ところが論証的表記法では、「テキスト変更の意味的・言語的内容」だけが重視されるので、**der Mensch** > **die Menschen** と記載されるだけである。

一般に、マルクス、エンゲルスは、語句を修正する場合、修正の単位をアルファベット単位で行い、修正の規模を最小限に留めている。

(2) 3 行目では、**das** を **die** に変更する場合、**d** はそのままにして **as** だけを **ie** に書き換えている。

(4) 16 行目では、**zum Grunde lag** を **zu Grund gelegt wird** に変更する場合、**m, a** だけを抹消し、その後に **ge, e, t, wird** だけを書き加えている。

(4) 38 行目では、**Verkehrsform** を **Verkehr** に変更する場合、ただ語尾の **sform** だけを抹消している。

しかし年報版では、変更の実現形態は無視されるので、(4) 16 行目の変更は、**zum Grunde lag** > **zu Grund gelegt wird** と記載される（註 7 参照）。また (4) 38 行目の変更は **Verkehrsform** > **Verkehr** と記載されている（註 10 参照）。

論証的表記法は、「テキスト変更の意味的・言語的内容」と変更の具体的実現形態とを区別し、後者を取り除くことによって「手稿の持つ偶然性を捨象する」ことを目指す。しかしここに編集者がテキストに恣意的に介入する余地が発生する。

ここではその一例として、(2) の冒頭の六行の文章を取り上げて考察してみよう。

[20] Die Geschichte ist nichts als dieAufeinan- 9.
derfolge der einzelnen Generationen,
die von denen Jede dasie ihr von allen
vorhergegangenen hinterla[ssenen] übermachten
Kapitalien, Materiale, Produktions-
kräfte exploitirt,

冒頭の六行の変更点は、以下の四箇所である。

- (1) von denen の前の die が抹消された。
- (2) das の as が ie と書き換えられて、die と変更された。
- (3) hinterla が抹消された。
- (4) その後に übermachten と書かれた。

年報版では、この箇所のテキストは以下のように書かれている。

[20] Die Geschichte ist nichts als dieAufeinan- 20)
derfolge der einzelnen Generationen,
von denen Jede die ihr von allen
vorhergegangenen übermachten
Materiale, Kapitalien, Produktions-
kräfte exploitirt, (下線は筆者)

次に年報版アパレート (S.229) では、テキスト 3~4 行目の変更について Jede <das ihr von allen vorhergegangenen hinterla>と記載されている。

(1)の die の遺漏については、既に述べたので、ここでは問題にしない。問題は、オリジナルにおける(2)(3)(4)の変更の表記が、どうしてアパレートのように表記されたのか、という点にある。論証的表記法においては、テキスト変更の実現形態を捨象する反面、語句の変更を個別的に報告するのではなく、その変更を引き起こした意味的連関を提示することを課題とする。

「異文表記の重要な原則は、テキスト変更箇所それぞれを個別的に示す、つまり原子のようにバラバラに扱うのではなく、むしろそれらを時間的順序ならびに言語的・意味的連関において提示することである。」(シュパール、2007, p.24 傍点はシュパール)

つまり年報版は、das が die に変更されたという事実直面した場合、ただその事実だけを報告することでは満足せず、das から die への変更が生じた時点ないし場所を特定しようとする。ここでは当初 das ... Material (単数形) と書くつもりで書き始めた文章のある時点で die ... Materiale (複数形) に変更する意志が著者エンゲルスの心中に生じたものと想定して、年報版編集者は、その変化の発生した時点を hinterla と書きかけて中断し、

hinterla を抹消した時点と推定しているのである。なぜなら hinterla に後続する übermachten はすでに複数形語尾変化となっているから、単数形から複数形への変化はすでにそれ以前に生じていなければならないからである¹⁴。

しかしこのような推定を行ったために、年報版アパレートが括弧で括った<das ihr von allen vorhergegangenen hinterla>のうち実際に変更が加えられた単語が、das と hinterla だけであり、ihr von allen vorhergegangenen には全く改訂が加えられていないという重要な情報が犠牲にされてしまった。

テキストの変更箇所を「時間的順序ならびに言語的・意味的連関において提示する」ことは、一見すると、望ましい編集方法であるように見えるが、実は、ここに編集者がテキストに恣意的に介入することを許す道が開かれるのである。

他方、テキスト変更の「時間的順序ならびに言語的・意味的連関」を解明することは、それ自体、テキストの解釈作業を不可欠に伴う作業である。こうした作業は、むしろ読者に委ねるべき作業であり、編集者が担うべき仕事ではないと筆者は考える。しかも、上記の例のように、マルクス、エンゲルスが執筆のいかなる時点で、das (単数形) から die (複数形) への書き換えの決断を下したのかを推定的に特定するという作業は、果たして編集者が負うべき課題であるのか、疑問である。

しかし新 MEGA は、このような論証的表記法を編集方針として貫いてきた。MEGA I-5 巻の異文表記もこれに基づいて行われる。CD-ROM 版が、MEGA I-5 巻の付録として製作される以上、CD-ROM 版の異文表記がアパレートと完全に乖離することは避けるべきである。しかし、CD-ROM 版の必要性の決定が、従来の紙媒体による論証的表記法の不十分性を認識した上での選択であったことを考慮すれば、CD-ROM 版の異文表記を、年報版アパレートと全く同一のものにすることを愚かしさもまた明白であろう。

シュパール自身も、大村泉に宛てた「添え状」において、次のように述べている。

「CD-ROM 版『ドイツ・イデオロギー』では、MEGA 本体のテキスト部や学術附属資料部とは異なるテキスト再現を試みるべきで、草稿オリジナル画像の解読原稿として添えるべきは渋谷方式のそれ、すなわち、MEGA の本文テキストに学術附属資料部の異文一覧を直接組み込んだ方式にすべきである」(大村・渋谷・平子、2007a, p.5)。

つまり紙媒体のアパレートでは論証的表記法、CD-ROM 版では記述的表記法を採用するという大まかな合意は、既に形成されている。しかし、両表記法の違いは、異文を本文テキストから分離してアパレートに掲載するか、本文テキストに組み込んで表記するかという配置上の問題に留まらない。記述的表記法は、編集者のテキストへの解釈的介入を極小化して、著者たちがオリジナルを推敲した諸過程をその実現過程をも含めて忠実に再現し

¹⁴ この推定は一見もっともらしいが、しかし、単数形から複数形への変更の時点はもっと早かった (das を書いた直後に die への変化が生じた) と推定することも、もっと遅かったと (das ...übermachte Material と書いた直後に、Material の語尾に e を書き、übermachte の語尾に n を加え、das を die に変更したと) 推定することも可能である。

ようとするのに対し、論証的表記法では、テキストの意味上の改訂とその実現形態を峻別しつつ後者を捨象する一方、個々の単語ないしアルファベットの変更であっても、それを個別の変更とは考えずに、そのような変更を引き起こした語句群全体を変更箇所として提示するという解釈作業を不可欠とする。従って両者の表記法は、各ページの異文表記においてかなりの乖離を発生させる。

アパレートと CD-ROM 版の表記上の乖離がどの程度まで許容されるのか、それを確定する作業は、今後、表記上のさまざまな問題点に遭遇する過程で、具体的に検討して行く必要がある。本稿において筆者は、最初の試みとして記述的方法を徹底させた表記法を採用し、マルクス、エンゲルスが実際に変更した箇所を、アルファベット単位で色分け表記することを試みた。

もとより刊行される CD-ROM 版がどのような均衡点に落ち着くのかは、今後の討論に委ねる他ない。CD-ROM 版ではすべてのページについてオリジナル画像が示され、必要な場合には、利用者は解読テキストをオリジナル画像と単語レベルで比較対照させることができる、これがアパレートとは異なる CD-ROM 版の存在理由であるとするならば、記述的表記法を徹底させることこそ、CD-ROM 版の価値を高める最良の選択であると、筆者は確信している。

参考文献（アルファベット順）

フープマン、ヴェックヴェルト、パーゲル（2007）「MEGA² I/5 で『ドイツ・イデオロギー』はどのように編集されるべきか」（大村泉訳）『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』第 48 号、八朔社 2007 年 06 月

大村泉、渋谷正、平子友長(2007)「再び廣松渉の『ドイツ・イデオロギー』を論ず」『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』第 48 号、八朔社 2007 年 06 月

大村泉、渋谷正、平子友長(2007a)「ベルリン・MEGA 編集者会議における新 MEGA 版『ドイツ・イデオロギー』編集に関する日＝独編集者間の合意事項について」『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』第 48 号、八朔社 2007 年 06 月

シュパール（2007）「新 MEGA における『ドイツ・イデオロギー』草稿のテキスト成立史的編集方法について」（佐山圭司訳）『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』第 48 号、八朔社 2007 年 06 月

平子友長(2007)「廣松渉版『ドイツ・イデオロギー』の根本問題」『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』第 48 号、八朔社 2007 年 06 月